

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00184

研究課題名(和文)パーミヤーン壁画の描き起こし図の作成とその美術史的研究

研究課題名(英文)Creation of the drawings of the Bamiyan mural paintings and its Art-historical study

研究代表者

宮治 昭 (Miyaji, Akira)

龍谷大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：70022374

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：破壊され消失したパーミヤーンの東西二大仏の仏龕に描かれていた壁画を、破壊前に撮影された多量の写真データを用いて、1/10縮尺の仏龕写真展開図を作成し、それを基にして精密な描き起こし図を完成させた(東大仏1幅、西大仏5幅)。この描き起こし図によって、仏龕壁画の全体と細部が明確となり、従来不明瞭な点が多かった壁画の主題・図像的研究に大きな道が拓かれた。すなわち、東大仏天井壁画がイランの太陽神ミスラを主尊として表し、西大仏天井・側壁画が「弥勒菩薩の兜率天世界」と賢劫千仏を表したものであることを、文献と比較作例の研究によって明らかにすることができた。その成果は多くの論文、展覧会図録によって公刊した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

パーミヤーン二大仏の仏龕壁画の精密な描き起こし図によって壁画の図像学的研究が大きく進み、ゾロアスター教の太陽神ミスラと弥勒上生信仰とが深く関わっていることが明らかとなり、学術的な意義は極めて高い。また、精密な描き起こし図の完成は、パーミヤーン文化遺産の保存と、今後の復興においても大きな役割を果たすことが期待され、その国際的、社会的な意義も大きい。

研究成果の概要(英文)：Using photographic data taken before the destruction, we created a 1/10th scale photographic development of the wall paintings on the niches of the East and West Great Buddhas in Bamiyan which were destroyed, and based on this, completed precise drawings (ink on Japanese paper); 1 width for the East Great Buddha and 5 widths for the West Great Buddha. These drawings clarified the entirety and details of the mural paintings in the niches of Great Buddhas, paving the way to further thematic and iconographic studies of the murals, which had remained obscure. Through comparative research of documents and examples, we clarified the ceiling mural of the East Great Buddha represents the Iranian sun god Mithra as the principal, while the ceiling and side murals of the West Great Buddha represent the Tushita Heaven of Maitreya and one thousand Buddhas of this Wise Aeon (bhadrakalpa). These results have been published in articles and an exhibition catalogue listed below.

研究分野：仏教美術史学

キーワード：パーミヤーン 仏教石窟壁画 大仏 中央アジア壁画美術 アフガニスタン仏教美術 中央アジア文化交流 太陽神ミスラ 弥勒信仰

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

アフガニスタンは古代において、「文明の十字路口」とも呼ばれ、東西・南北の文化がこの地で出会い、諸文化が並存し、かつ融合した地域であり、20世紀の初めから1979年まで、フランス、イタリア、日本、アメリカ、イギリス、ロシア、アフガニスタンの考古学者・美術史学者によって調査研究が進められた。しかし、1980年以降長期にわたる政情不安・戦闘が続き、実地調査は不可能となり、2001年にはバーミヤーンの二体の大仏と仏龕壁画は爆破され、消滅してしまった。その後、2003年以降、10年以上にわたって日本政府のユネスコ信託基金によって、日本・ドイツ・イタリアの三ヶ国のそれぞれ専門家チームによって、保存・修復作業が行われた。それによって大仏造像技法の解明や壁画の顔料分析、放射性炭素(C¹⁴)年代測定などが行われ、従来不明であったことに光が当てられた。しかし、現在なお国情は不安定で厳しい状況が続いている。

本研究はこうした状況の中で、研究代表者が1969年に名古屋大学調査隊(代表小寺武久氏)および1974、76、78年に京都大学調査隊(代表樋口隆康氏)に参加する機会を得、その際の写真資料(ネガ・ポジのフィルム) スケッチ・線図、調査ノートなどを基にして、バーミヤーンの東西二大仏の仏龕に描かれていた壁画の1/10縮尺の描き起こし図を作成することを第1の目標に掲げた。従来、東大仏の仏龕天井壁画に関しては、フランス隊、名古屋大学隊(宮治作図のスケッチ)の線図があったが、縮尺は入っておらず、細部に不正確な箇所も少なくなかった。西大仏の仏龕壁画に関しては、名古屋大学隊の宮治のスケッチ図があったが不十分な部分が多々あった。本研究は、二大仏の仏龕壁画の1/10縮尺の精密な描き起こし図を作成し、それによって、未だ不明な点の多い壁画全体の主題・図像を解明することを第2の目標に掲げた。

2. 研究の目的

本研究の目標は、前項に記したように、バーミヤーン二大仏の仏龕壁画の1/10縮尺の描き起こし図を作成すること、およびそれらの壁画の主題・図像を明らかにすることである。この二つの目標は、次のような二つの大きな学術的、および社会的な目的をもつものである。

第一にインドから日本にまで伝播し、展開する仏教美術史上の位置づけである。紀元前2c末頃にインド内部で興った仏教美術は、西北インドの広域ガンダーラ地方(現パキスタン北部、アフガニスタン東部)で、紀元1~3世紀頃にクシャーン朝の下で大きく変化、展開し、ガンダーラ美術が隆盛する。ガンダーラ美術はインドの土壌のもとに、ギリシア・ローマ、イランの美術伝承を摂取して、大きな変容と発展を遂げ、その後、5世紀頃まで存続する。一方、バーミヤーン美術はエフタル・チュルク(突厥)の時代(5c中頃~9c中頃)に、ガンダーラ美術を一部継承しつつも、新たにイランの後期ササン朝~ポスト・ササン朝、およびインドの後期グプタ朝~ポスト・グプタ朝の時代に興起する。このような美術史の大枠の位置づけが近年の研究で明らかとなってきたが、それはインドから日本までの仏教美術史上、どのような意義をもつのか、特にバーミヤーン仏教美術がどのような尊像・図像が表され、どのような信仰があったのかを明らかにし、中央アジア・中国・朝鮮半島・日本への仏教美術の伝播・変容・展開といった、仏教美術史上の位置づけを解明することを大きな目的とした。

第二に爆破され、消失した、貴重なバーミヤーン二大仏の仏龕壁画の精密な描き起こし図の作成によって、学術的な研究が大きく進むことが期待されると共に、ユネスコの世界遺産に指定されたバーミヤーンの今後の文化財、文化遺産の復興事業にも寄与することを目的とした。二大仏破壊後に、日本はバーミヤーンの文化財の保存・修復事業に貢献したが、今後アフガニスタンの本格的な復興に本研究成果が役立つことが期待され、社会的、国際的にも意義あるものとなることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、次の2つの方向性をもって、同時並行的に進め、その成果を展覧会として公開した。

(1) バーミヤーン二大仏の仏龕壁画の描き起こし図の1/10縮尺の描き起こし図の作成

二大仏の仏龕壁画の描き起こし図を作成するために、破壊前に撮影された多量の写真データ(京都大学調査隊によるもの、同人文科学研究所所蔵)を用いて、1/10縮尺の仏龕壁画写真展開図を、研究代表者宮治監修のもとに業者(アトリエ55木村朋子氏)に委託して作成し、それを基にして、壁画模写専門の正垣雅子氏(京都市立芸術大学准教授)によって、宮治との検討を重ね、和紙に筆を用いて、精密な描き起こし図を完成させた。

(2) 二大仏の仏龕壁画の主題解明と図像学的研究

二大仏の仏龕壁画の描き起こし図の制作と同時並行して、従来不明な点の多かった図像学的研究を深めた。その結果、東大仏の仏龕壁画がギリシア、インドの太陽神とも関係をもった、イ

ランのミスラを描いたものであることを、先行研究を批判的に検討して明確化した。また、西大仏の仏龕壁画については、従来、主題や図像内容に関する先行研究がほとんどなかった状況の中で、本研究によってその天井壁画が「弥勒菩薩の兜率天世界」を描いたものであること、側壁には賢劫千仏を表した可能性が高いことなどが明らかになった。

4．研究成果

本研究の研究成果は、論文・著書の刊行、講演会などによって公開したほか、次の特別展覧会としても結実した。特別展「文明の十字路 バーミヤン大仏の太陽神と弥勒信仰 ガンダーラから日本へ」龍谷大学龍谷ミュージアム（2024年4月20日～6月16日予定）、三井記念美術館（2024年9月14日～11月12日予定）。この龍谷大学龍谷ミュージアムで開催の特別展は、研究分担者である岩井俊平氏（龍谷大学龍谷ミュージアム教授）が主担当を担い、本科学研究の成果を広く発信させることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 宮治昭	4. 巻 37
2. 論文標題 美術から見たガンダーラの阿弥陀信仰	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東方	6. 最初と最後の頁 71-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩井俊平	4. 巻 105-1
2. 論文標題 都市の廃絶と交易ルート クシャーン朝勃興期のバクトリアの場合	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 史林	6. 最初と最後の頁 5-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩井俊平	4. 巻 18
2. 論文標題 中央アジアにおける仏教寺院の伽藍配置の変遷	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 帝京大学文化財研究所研究報告	6. 最初と最後の頁 79-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 8件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 宮治昭
2. 発表標題 パーミヤンの大仏とその仏龕壁画
3. 学会等名 龍谷大学龍谷ミュージアム記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 宮治昭
2. 発表標題 釈迦・転輪聖王・弥勒の信仰と美術
3. 学会等名 龍谷大学龍谷ミュージアム記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 岩井俊平
2. 発表標題 中央アジアの仏教寺院を掘るーキルギス共和国、アク・ベシム（スイヤブ）遺跡・第2仏教寺院址の調査（2022）
3. 学会等名 西アジア発掘調査報告会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Shumpei Iwai
2. 発表標題 Japanese Mission to Bamiyan after 2023
3. 学会等名 The Symposium Politics and Archaeological Missions in Afghanistan: Japanese and International and Research on Afghanistan and Iranian Plateau / The Japan Society for Promotion of Science（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宮治昭
2. 発表標題 名古屋大学のアフガニスタン調査と 夢想・歴史・神話／宗教 を結ぶ“前田学”の原点
3. 学会等名 前田耕作先生の業績を語る会「東京国立博物館平成館大講堂」（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩井俊平
2. 発表標題 アク・ベシム遺跡第2仏教寺院 (AKB-18) の調査
3. 学会等名 帝京大学文化財研究所 / キルギス共和国国立科学アカデミー (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Shumpei Iwai
2. 発表標題 Bamiyan Buddhist Caves and Squinches -Contributions from the Japanese Research Team in Afghanistan-
3. 学会等名 The Symposium "Afghanistan, Architectural Heritage, Global Politics" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮治昭
2. 発表標題 パーミヤーンの調査・研究を振り返って - 二大仏の破壊とその後：現在と課題 -
3. 学会等名 パーミヤーン・フォーラム - 二大仏の破壊前と現在：課題と展望 -
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩井俊平
2. 発表標題 都市の廃絶と交易ルート　クシャーン朝勃興期のバクトリアの場合
3. 学会等名 史学研究会例会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩井俊平
2. 発表標題 新たな調査成果から見たパーミヤーン遺跡の年代
3. 学会等名 パーミヤーン・フォーラム - 二大仏の破壊前と現在: 課題と展望 -
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮治昭
2. 発表標題 ガンダーラにおける大乘仏教美術の様相—大構図浮彫の「楼閣タイプ」と「蓮池タイプ」を中心に—
3. 学会等名 密教図像学会第40回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮治昭
2. 発表標題 ガンダーラ美術から見る初期大乘仏教
3. 学会等名 東洋大学東洋学研究所公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岩井俊平
2. 発表標題 パーミヤーン地域のスキンチ・アーチ
3. 学会等名 2020年度第2回パーミヤーン科学研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岩井俊平
2. 発表標題 伽藍配置から見た中央アジアにおける仏教の伝播
3. 学会等名 国際ワークショップ「考古遺物から見た仏教文化の伝播と交流 古代日本と中央アジア」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩井俊平
2. 発表標題 大仏破壊後のパーミヤーン 新たな調査と発見
3. 学会等名 シンポジウム 玄奘が見たパーミヤーンと京大隊が見たパーミヤーン
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 龍谷大学龍谷ミュージアム、三井記念美術館編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 龍谷大学龍谷ミュージアム、三井記念美術館	5. 総ページ数 207
3. 書名 2024年度春季特別展「文明の十字路。パーミヤン大仏の太陽神と弥勒信仰ーガンダーラから日本へー」 (担当: 宮治昭「文明の十字路 ガンダーラとパーミヤンー光り輝く釈迦・転輪聖王・ミスラ・弥勒ー」)	

1. 著者名 宮治昭、肥田路美、板倉聖哲編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 704
3. 書名 アジア仏教美術論集 東アジア アジアの中の日本 (担当: 宮治昭「総論 アジアの中の日本ーインド・ガンダーラからの視座ー」)	

1. 著者名 近本謙介、影山悦子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 376
3. 書名 玄奘三蔵がつなぐ中央アジアと日本（担当：宮治昭「パーミヤーン西大仏と仏龕壁画 弥勒信仰の生成と玄奘の見聞・信仰」）	

1. 著者名 木俣元一、近本謙介編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 72
3. 書名 宗教遺産テキスト学の創成（担当：宮治昭「生き続けるパーミヤーン - 大仏破壊の前とその後、現在・未来へ」）	

1. 著者名 前田耕作、山内和也編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 409
3. 書名 アフガニスタンを知るための70章（担当：岩井俊平「2 アフガニスタンの風土」「5 アフガニスタンの曙」「33 メス・アイナク遺跡群」「55 アフガニスタンにおける日本の学術調査」）	

1. 著者名 Wannaporn Rienjang and Peter Stewart(ed.), Warwick Ball, Martina Stoye, Peter Stewart, Tadashi Tanabe, M.E.J.J. van Aerde, A.D.L. Mohns, and A.G. Khan, Shumpei Iwai, Ken Ishikawa, Joy Yi Lidu, Juping yang, Ian haynes, Iwan Peverett, Wannaporn Rienjang with contributions by Luca M. Olivieri	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Archaeopress Publishing	5. 総ページ数 264
3. 書名 The Global Connections of Gandharan Art	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	岩井 俊平 (Iwai Shumpei) (10392549)	龍谷大学・公私立大学の部局等・教授 (34316)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 第1回 パーミヤーン科研研究会	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 第2回 パーミヤーン科研研究会	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 パーミヤーンフォーラムー二大仏の破壊と現在：課題と展望	開催年 2022年～2022年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関